第２講：かしもの・かりもの

澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*
幡鎌　一弘　*Kazuhiro Hatakama*

天理教の独特な教え、「かしもの・かりもの」の教理に込められた意味を確認することによって、今ここに生きていることの意味を、この教えに照らして捉えなおしてみたい。

近代科学的世界観に根ざした「ものの見かた」が今日、私たちにとって常識になっている。こうした生活世界に生きる現代人の多くは、これまで本来的なあり方を見失ってきたきらいがある。私たちの身体は親神の「かしもの・かりもの」である。このことは「元初まりの話」で説かれる親神のご守護が分かれば、その教えに込められた意味もよく理解できる。私たちが親神のご守護の世界に生きていることは、「おふでさき」には、つぎのように諭されている。

たん〳〵となに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ　　三・40･135

また、「こふき話」明治十六年本（桝井本）には、つぎのように記されている。

このよふわ月日りよ人のからだなり。天ちきあわせのせかい。人間わ、月日ほところにすまいしているものなり。それゆゑに、人間のすることに、月日のしらんことわなし。人間わみな神の子なり。みのうちわ神のかしものなるゆゑに、たにんとゆうわさらになし。みなきよだいなり。（中山正善『こふきの研究』天理教道友社、1957 年、129 頁）

親神のご守護の説き分けは、眼うるおい（身の内）と水（世界）、あるいは、温み（身の内）と火（世界）というぐあいに、言語表現こそ異なるが、それらの語の意味する原理それ自体は同じものである。このことは人間身の内と世界が、「二つ一つ」の関係において、本質的につながり合っていることを明示している。この教えは宗教学的にいえば、私たちが「聖」と「俗」の重なり合いの中で生きていることを示唆している。

親神のご守護は、「人間身の内」と「世界」に充ち満ちている。私たちは親神のご守護によって〈生かされて生きている〉。親神は私たち一人ひとりの身の内に入り込んで、絶えず十全の守護をくださっている。

にんけんハみな〳〵神のかしものや
神のぢうよふこれをしらんか　　三 126

「おさしづ」には、次のように諭されている。

人間というは、身の内神のかしもの・かりもの、心一つ我が理。　（明 22・6・1）

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。（明 22・2・14）

私たち人間は、これまで生まれ更わり出更わりしてきたし、将来も生まれ更わり出更わりしていくが、魂は生き通しであると教えられる。

天理教の教えの根本は、この世界が親神のご守護の世界であり、私たちの身体が親神からの「かりもの」であるということにある。私たち一人ひとりは親神の懐住まいをさせていただいていること、さらに、私たちの身体が親神からの「かりもの」であることをよく心に治めることが肝心である。したがって、この教理は、ただ知的に理解すればよいというものではない。「理を感じる」ことの意義が強調されるように、心に治めなければ本当に理解したことにはならない。親神にもたれ、心勇んだ日々を送るところに、親神の望まれる私たちの本来的なあり方、すなわち「陽気ぐらし」への道が拓かれていく。（澤井義次）

今回は、天理教外の史料を使いながら、教えや活動がどのように見られていたかということを通して考えてみた。その要旨は、『みちのとも』に掲載される予定なので、ここでは、今回知り得た４人の人物について、簡単に紹介しておきたい。

○兼（金）子道仙　『真理之裁判』（慈無量社、1890 年）の著者。三河国生まれ。浄土宗西山派僧侶。幼いころに徳林寺（現、愛知県西尾市西幡豆町）で勤めていたことがある。西山派の雑誌『真之光』を発行し、日清戦争後「宣教団」を組織して各地を宣教する。のち、台湾開教に活躍し、その後も台湾に残って活動した。台湾花蓮港庁玉里に寺庵を構え、農場を経営（『通俗生前と死後』文化教学叢書刊行会、1926 年）。同書によれば、当時すでに 70 歳近く、『九十五翁老僧実験　精神治病秘伝』（日本仏教新聞社、2009 年３版）によれば少なくとも、95 歳まで存命であった（没年不明）。『真理之裁判』は『真之光』別冊として発刊、1893 年に内容を大幅に改めて再刊された。

○羽根田文明（1848 ～？）『天理王弁妄』（法蔵館、1893 年）の著者。1848 年、近江国滋賀郡大津観音寺町（現、滋賀県大津市）生まれ。生家は青物乾物の行商を営み、京都で丁稚奉公中に幕末の動乱を体験。帰国後、1878 年に大津北保町戸長となり、コレラ病予防委員、学校保護役を兼ね、翌年には大津町会議員となった。仏教の師は実行院顕綱和上という（人物像不明）。捲煙草の製造を手掛けるものの、1889 年妻の病死を機に廃業し、幻燈講演を糧に、おもに滋賀県・岐阜県をまわった。このころ天理教やキリスト教の批判講演をしていた。のち、歌道を志す。雑誌『湖国の光』（のち『倭国の光』）を創刊。彼の著作の中で最も著名なのは、『仏教遭難史論』（国光社出版部、1925 年）で、辻善之助が序文を寄せている。（羽根田文明『追想記』羽根田文明、1922 年）

○足立普明（1860 ～ 1903）『天理教信ずるに足らず』（如是社、1893 年）の著者。福知山城下に生まれ、曹洞宗丹波国何鹿郡以久田村（現、綾部市）高台寺などの住職を務める。キリスト教に対する問答書『群鷄一鶴』（其中堂、1884 年）で名を知られるようになり、『足立普明意見書』（其中堂、1888 年）や『耶蘇教亡国論』（如是社、1893 年）などを著わし、雑誌『第一義』・『如是』を創刊する。「破邪顕正」に熱心な論客の一人であった。（川口高風「明治以降曹洞宗人物誌」（３）『愛知学院大学教養部紀要』58-3）

○山中重太郎（1871 ～ 1947）　1899･1900 年の２年間に『天理教の本領』（山本文友堂）・『天理教御教祖御一代記』（賀来申太郎）など、天理教の立場の本を６冊出版した。近江国蒲生郡鏡山村大字山中（現、滋賀県蒲生郡竜王町大字山中）生まれ。同志社を出て徳富蘇峰の国民新聞社の日清戦争従軍記者となるも、記事が問題となり罷免されて帰国。滋賀県下の天理教の隆盛に驚き、本部に乗り込んで、1899 年５月以後、中山眞之亮初代真柱・松村吉太郎と数度にわたり直接面会した。それが上記の著作につながった（『天理教御教祖御一代記』）。その後天理教を批判する立場に変わり、政治家へ働きかけ続ける。『大愛の大日本』（大日本大愛会、1931 年）に天理教と自らの関係を回顧している。今井新造が国会で天理教を糾弾したのは、山中が自らの告訴を今井に進言したことがきっかけである。（幡鎌一弘）